



# 自然の『モノサシ』 —いのちが教えてくれること—

谷口 正成

聞き手 堂野 胡桃 西尾 優花 西 菜那 (石川県立能登高等学校2年)

実際に採集する谷口さん

## 自己紹介

私は谷口正成と申します。昭和3年の8月25日生まれで、もうすぐ米寿の88歳になります。私は元々ね、こっから10キロほど離れた輪島の大西山というところの生まれなんです。8人兄弟の一番末っ子で、戦時中の大変な時に育ったんですよ。家族は、現在私と家内の二人きりなんですけど、子どもは長男と長女、2人。ほんでその長男の孫はいま東京にいます。大学は今年で卒業なんですけど、就職が決まったと連絡がありました。

私は地元の小学校、中学校を出て、柳田の農業高校を卒業しました。それから終戦直後に、金沢の野田山の麓にある元騎兵隊の兵舎であった臨時の学校に入学して、3年ですね。それからこっちへ帰ってきて、近くの柳田中学校でずっと退職まで教師をしていました。40年の生活の中で、36年ほど

は中学校の教員。そしてこの近くにあった黒川くろがわ小学校、そこで校長になって4年間。その後、まあ悠々自適といいますか、わがままな生活をさせていただいて、今日に至るわけです。

## 貧しい子供時代

小さい頃はね、戦時中という乏しい生活の時代ですから、色々な面で鍛えられたんですね。それは何に鍛えられたかという、子供の御守り。それで純粋な百姓の家ですから、厩うまやというところには大きな牛が、2頭も飼われておりました。背中には子どもをおんぶしながら、大きな牛の餌やり。不思議とあの頃は、つらいとは思わなかったですね。誰もやるもんがおらんから、やらなきゃあないと思いました。背中に1人おんぶし、1人には手を繋いで、山から土手から田んぼから、木の生り物があれば木の下へ行って採ったり。山には山葡萄ぶどうがあったり梨があったり、生り物が豊富だったんです

よ。そういう自然そのもののところに暮らしておりました。山や子ども、それから家畜。周りの環境の良さというか楽しみを、実感として感じました。それから私はね、生き物に段々興味を持つようになったんですよ。

### 子供時代の楽しみ

あんな時代ですから、おもちゃというのは到底買えなくて、全然遊ぶおもちゃがないんですよ。それで私は竹などを切っては、全部手作りで作りました。簡単に作ったのは笛。火箸を囲炉裏で焼いて穴を開けるんですよ。位置を変えると音が違ったりして、本当に楽しかったですね。

### 自然を守りたい

私は40年以上、水生生物の生態調査をしております。生態調査のキッカケは、柳田中学校で理科の教員をやった時に遡りますね。その頃にもすごくこの川にはウグイやらフナ、それから山にはキジやらキツネ、ウサギがいました。そういう動物や魚が段々いなくなってきて、おらんようになったと。そういう話題が盛んに出た時に、柳田に魚とか漁を見たりする柳田河川漁業協同組合ってのがあるんですけど、その会の一人が私に言うたんです。「先生、あんた理科の教員やな。この魚こんながなくなると、これ何で？ 死んだ魚が、浮いては流れとる」と。その人が手に持ってきたのは、背骨の曲がったウグイでした。こんな魚がこの川に流れだしたのは、どういうことが原因なんやと。それがあって私は、それを説明する学力も何もないけども、「調べて、頼むがいや」ということで、それが発端なんです。理科の教諭として、自分の出番だと思いました。

### 水生昆虫の研究

柳田中学校に勤めていた40代半ばの頃にね、金沢大学の理学部の科学教育研究室というところで1年間好きなことを研究できる、そういう機会があったんです。そのとき通った行先は全部白山です。白山の山脈、谷間、非常にきれいな自然の環境のとこ。そこへ毎日行つとる間に、生き物のすざを感じましたね。初めて見る水生昆虫やからね。場所を変えらるとおる所とおらん所、数の多い少ない、それから種類が全然違うんです。こんなの能登の川にはないだろう、と思うようなものばかりが棲んどって、そこで一年間勉強させてもらいました。それから町野川を私の研究の場所にしましてね。曾々木からずつと鉢伏山の麓まで13地点ほど場所を決めて、そして1年間根気よくやって整理しました。その日の川の水温、気温、どんな生き物が何匹おったか、全部記録にとつてあります。

### 調査について

13地点っていうのはどこからかという、田代っていうところね。鉢伏山に近いところを1番2番としてます。調べ方でも色々ありましてね。いわゆる『定量調査』といって100cm四方の枠の中に、どんな種類が何個体おるかを調べるんです。私1人、連れがおらんでね。2月なんか、この辺りは雪が多いし、かんじきやらリュックに道具一式担いで、スコップも担いで谷間に入ったりしました。これね、1か所やるのに2時間かかるんですよ。1年に何回調査するかというと、5月と8月、それから11月と2月の計4回を調べるんです。水生生物は1年から1年半くらいで卵から孵って



谷口さん宅にて

和名	学名	個体数	体長	重量
st.2 ④ キロカガクシ	Potamathus kamonis	3		4.0
シロハコカガクシ	Baetis thermicus	48		73.0
エルモヒラタカガクシ	Epeorus latifolium	11		76.0
ヒメヒラタカガクシ	Epeorus tobironts	1		7.0
バダカガクシ科	Ephemerella sp.	3		3.0
ウエヒラタカガクシ	Epeorus uenoi	1		2.0
ヒメヒラタカガクシ	Rhythrogena sp.	1		9.0
ヒラタドムシ	Mataeopsephurus japonicus	39		630.0
カガンボ科	Tipula sp.	1		4.0
シギアブ科	Atherix japonica	3		31.0
ユスリカ科	Chironomidae	17		5.0
コガシメヒシラ	Hydropsyche bsevilinata	3		402.0
ウルメシメヒシラ	Hydropsyche ulmeri	5		59.0
イナシヤメヒシラ	Mystrophora inops	2		6.0

成長して、空中へ出てしまうんです。一番育って大きくなって調べやすいのは、大体5月なんですわ。季節でどう変わるかにもよるので、4回調べとるんです。

## 川の『モノサシ』

どこにどんな水生生物がおるかということ調べることで、水の質が良いか悪いかが分かるんです。上流は、生活排水、農業などの影響が少ない。やから水が綺麗で、生き物も多いんです。下流は、生活排水やら取り込んだ水が流れてくるから、生き物も少なくなる。

水生生物は川のモノサシ、『指標生物』と言われとるんですわ。色んな講習会などに来てくれと言われて学校とか公民館に行くと、川の水質を調べてほしいと言われることがあります。だから私は1週間程かけて、水生生物を調べるんですわ。場所によって水生生物は、種類がガラッと変わるんですわ。

ほれから、川の流れには瀬と淵があるんです。瀬というのは水深が浅く、流れが速い。淵というのは淀みがあって、流れが緩やかなんです。瀬に棲む生き物は、流れが速いから岩にくっつく。カゲロウ、トビケラ、カワゲラとかね。それから淵に棲んどるものは、ガガンボ、ブユとかですわ。流れのないゆったりしたところに、巣を作って棲んどるんです。環境をうまく利用して生きてるわけですわ。

## 身近な水生昆虫

この辺に一番多いのはカゲロウの仲間。夏によく地面にユラユラとしたり、<sup>かげろう</sup>陽炎っていうのあるでしょ。あれが由来なんです。ラテン語で『儂い命』という意味なんですわ。川の中に4ヶ月か5ヶ月おって、成長して空中へ出たら数時間から数日の間に一生を終える、非常に寿命の短い生き物なんです。

それからヘビトンボ。ちょっと大型なんでね、気持ち悪いんですよ。捕ってバケツの底に入れとくと、小さいカエルやら昆虫をすぐパチッと挟んで食べるんです。一般的に料理に使ったり、薬として使われとるんですよ。あと佃煮としてね(笑)

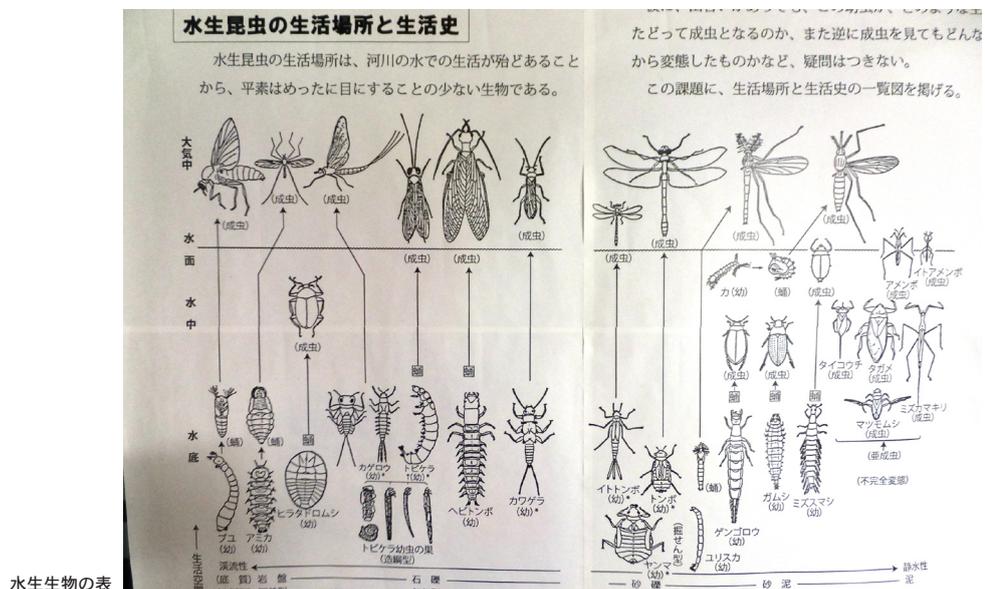
## 珍しい水生昆虫

水温とか気候風土、林の関係、自然環境の中で特別なところにしか住んでいないというのは珍しいわけやね。能登で言いますと鉢伏山の頂上にブナの林がありまして、谷間を降りていきますとほんとにせせらぎで、ものすごい水温が低いきれいな川に住んでいるムカシトンボ。それからあまり見られないんですが、チョウトンボとかね。これは静かな谷間の沼みたいな水たまりに棲んでいるんです。羽が紫色の非常に綺麗な色をしておりまして、端っぼが薄い透明みたいな色なんです。これはなかなか見れないですよ。

もう1つは、ハッチョウトンボ。これは体長が3cmくらいの、日本一小さいトンボです。環境に非常に敏感なんです。このトンボについては、村の天然記念物にしてもらいました。それから奥能登ではないけど、<sup>ほくい</sup>羽咋郡の<sup>ほうだつ</sup>宝達山。あそこにはトワダカワゲラ。カワゲラの仲間でも少ない、溜まりの中に住んでいないで、地の葉っぱが積み重なり、雨水が少し流れて湿り気のある谷間に住んでいるカワゲラ。十和田湖畔で初めて見つかったから、名前に地名がついとるんです。能登でトワダカワゲラがおらんか一生懸命探したけど、出会ったことはないですわ。

## 空飛ぶ生きた化石

ムカシトンボというのは、せせらぎの静かに流れるよう





(上左) ヘビトンボの幼虫  
(上右) カゲロウの幼虫  
(左) チョウトンボ 能登町上長尾にて  
(下) ムカシトンボの幼虫



な、そういう川の源流にある石の裏側に隠れるようにしてヤゴは棲んどるわけですね。大きくなっても8年ほどで20mm～22mm、非常に小さいものですね。特にどういう所に棲んでいるのかというと、日本の国内ではよく棲んでいるんです。北海道とか本州、それから四国、九州とかね。主に溪流、温度が低くて、本当に水の綺麗なところにしか棲んでいない。そして流れの非常に速いところが好きで、淀みがある流れの悪いところには棲まないんです。

### 里山稲作農林資料館

旧当目小学校に今年から、『里山稲作農林資料館』が出来たんですよ。カゲロウやらも採集して、展示してある所に標本にして置いてあるんです。町野川のその種類全部おるかと言うと、残念なことにはない。採集した水生生物をホルマリン溶液に入れて栓をしてあるんですけども、その頃いい標本ビンがなくて、コルクの栓をしてたんですけど中のホルマリン溶液がなくなってカラカラになってビンの底で干せ河童になって何か分からなくなったんです。分からなくなった標本が

6割か7割で、残った良い物を整理して、今だいたい13地点の川で採集した生き物の標本と写真を並べてあります。

### 本に込めた思い

植物、動物、魚、昆虫などは図鑑があります。ところが、水生生物の図鑑はないんです。まだ研究が進んでなく細かすぎて図鑑にしようと思ってもできない。一番苦労したのは、そういう参考になる図鑑や資料がなかったことです。だから私は全国の出版会社をお願いして資料や印刷物を結構集めました。その学者たちの了解も得て情報を集約し、私は一冊の本を出したんです。

### 姿を残してやりたい

剥製はね、私が教えてた中学校の女の子がキッカケなんです。ある朝ハンカチに巻いて持ってきて「先生これが、うちの前のガラス戸の下に落ちてもがいてて、まだ生きてます」と。それ見たらね、鳥です。その鳥がなんやいうたら、アカショウビン。



(上左) 実際の標本  
 (上右) 水生昆虫の写真  
 (左) 旧当目小学校前に建てられた「里山稲作農林資料館の看板」  
 (下) ヤマドリとヤマセミの剥製



非常に綺麗な鳥で名前の通りくちしが赤いんです。それをね、「この子が可哀そうだ。こんな綺麗な鳥、なんとかならないんですか」とって持ってきたんです。綺麗やからなんとか出来ないかということで、剥製を思いついたんです。死んでしまっても、なんとか姿を残してやりたい。そういう思いからしましてね。剥製の本を1冊取り寄せて、独学で勝手に始めたんです。当時、柳田に30人くらいのハンターがおったんですよ。タヌキやらキツネやらキジ、テン、オシドリ、カワセミ、ヤマセミ。それを持ってきては剥製にしてくれと、私の家に来るんですわ。頼むしやってくれと言われてやったら、見事に私はその虜になりました。自信持って「分かりました。やります」と言うようになったのは、それから数年後です。

### 剥製を手掛ける

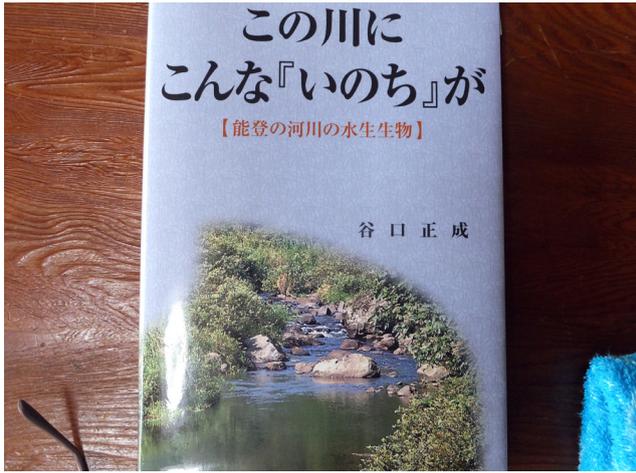
剥製は手袋をしないです仕事なんです。毛を抜くようにするために、まず毛止めをせんといかんわけや。素手でやらないと駄目なんです。毛止めする前に<sup>なめ</sup>鞣す。鞣すっていうのは、脂肪を取って柔らかくすること。そのために何を使うっていうたら、苛性ソーダー(\*1)というやつです。それが脂肪を溶

かすのにもってこいなんです。それを内側に塗り付けて、一晩置いておくんです。そしたら油が分解されて水が浮き上がってくるから、朝になって脱脂綿や布で吸い上げてカラカラにしてしまう。そして脂肪が抜けた後に、毛止めをする。1つやるのに、簡単な鳥なら大体4時間~5時間くらい掛かるんです。資料館に飾ってあるムジナの剥製は生涯忘れられん程、上出来なんです。県庁にもキツネの剥製を持ってきました。手がけた剥製の数約300体くらいになりますね。

(\*1) 苛性ソーダー…水酸化ナトリウムのこと

### 自然の現状

水生生物は非常に弱い生き物。その種類は、環境の変化のために年々減少しとるんです。最近の川の状況を河川漁業協同組合の組合長に聞いたんですけど、雨が降らなくて川水が少ない。そして段々浅くなって、魚の餌になる藻がなくなってきている。林相、自然形態が変わってきとるんです。生き物の命に関わるものがなくなっていくってことになれば、人工的に変えることは不可能に近いということです。何千年何万年という年月で出来あがったこの自然を今、人の力



谷口さんの著書

で取り戻す、元に戻すということは並み大抵ではない。だけでも放っとくわけにもいかなから、何から始めてみればいいのか考えてみてください。

## 川に対する思い

川へ入るとやっぱり子供たちが一番喜びますね。それを見ると私も非常に元気をもらって、楽しいんです。私が何十年かここに住んで思うことは、川や自然に対する人々の関心が非常に薄いことやね。これが一番恐ろしいです。今までのように本格的にはできないけども、時間の許す限り体の調子がいい限り、生き物の追跡にあたってみたいなと思っています。

[取材日：平成28年8月2日・10月1日・11月23日]

## PROFILE

**谷口 正成** たにくち まさしげ

昭和3年8月25日・88歳  
元・小中学校理科教諭

輪島市南志見地区生まれ。公立学校の教員として勤務していた45歳頃から川の生物調査や剥製作りに取り組むようになった。鉢伏山を源流とする町野川の水生生物を40年近く調査しており、地元では「生き物博士」として親しまれている。今まで採取した生物は110種類。全国的にも希少種とされるムカシトンボの幼虫も発見した。平成8年知事表彰（自然保護）、平成16年環境大臣表彰（環境保護功労者）。著書「この川にこんな『いのち』が～能登の河川の水生生物～」(西光出版)



## ● 取材を終えての感想 ●



私は今回の「聞き書き」を通して、たくさんの事を経験しました。自分たちで取材、書き起こしをして、レポートを作る。初めは上手くできるかどうか、とても不安でした。でも先生や先輩にアドバイスを受け、なかでも谷口さんは表や図を指し棒を持って説明してくれたり、レポートの作成に積極的に協力してくれました。それだけでなく、実際にカゲロウなどの水生昆虫を採取しに行ったり、鉢伏山のブナ林を探索したりなど、貴重な体験ができました。能登の自然について学んだこともたくさんあります。水生生物が年々減少していることや、川や自然に対する関心が薄くなってきていること。これを読んで、谷口さんの思いが少しでも多くの人に伝わってほしいです。そして、私たちのわがままに付き合ってくれた谷口さんや先生に感謝です。ありがとうございました。

(堂野 胡桃 写真：左)

私は今回初めて「聞き書き」に参加しました。どういう事をやるのか全く分からず参加したのですが、想像していたよりも大変でした。なかでも、録音した谷口さんのお話を文字に書き起こすという作業が時間が掛かり一番大変でした。でも小見出しをつけ、まとめ終わった時には、とても達成感を感じました。実際に川へ行って水生昆虫を捕まえたり、鉢伏山に登ったりと普段できないような体験がたくさんでき、楽しく聞き書きを終えることができました。ありがとうございました。

(西尾 優花 写真：右から2番目)

初めて聞き書きに参加して、最初はちゃんと名人にインタビューできるかととても不安でした。でも、実際に名人にインタビューすると、とても優しく、資料もたくさん貰えてとても安心しました。インタビューだけではなく、川に水生昆虫を捕りに行ったり、山に登ったり色々な体験ができ、地域に貢献する方の貴重なお話が聞けて、里山の自然が変わっていくのを知り自分の住む地域の自然について考えるいい機会になりました。初めての経験がたくさんあったけど、聞き書きに参加できてよかったです。

(西 葉那 写真：左)